

大通公園を望む窓辺から

気になること

常任理事 北野 明宣

男女とも平均寿命が毎年確実に伸びて日本国民の長寿化が目覚ましいなか、地域医療現場における医師不足、看護師不足が深刻な問題となっている。

7対1看護基準導入により、なりふり構わず大学病院や大規模病院がこぞって看護師獲得競争を開始したことがきっかけで、北海道内でも看護職員就業者数が年々増加してきたが、その一方で看護師、准看護師、助産師の2年ごとの看護職員就労調査結果では就業者年代別平均年齢が上昇しており、医療現場における看護職員の高齢化現象が著しいことが明確になった。

その他要因として就業環境改善、未就業者再就業支援、離職防止対策、定年65歳への延長や国民年金制度改革による年金支給開始年の引き上げ等が考えられる。

本道における新卒看護職員就業者数は平成14年度をピークに約4割減少し、現在では2,700人前後でその年代別平均年齢も年々上がっており准看護師において著しい。新卒看護職員数増加は、関係者の努力にもかかわらず諸般の事情により望みは薄い。また、看護職は医療現場での積み重ねた経験・知識が物を言う職種であるだけに3Kと言われる看護現場では、若さと体力が必要となる職場でもある。

北海道は新幹線、高速道路、航空機等交通手段の急速な整備や、高学歴看護職員の大都市中央志向により、地域内定着率の減少が起こっている。また道内では、看護職に医師のような緊急臨時的派遣制度が確立されておらず、地域における看護職員の高齢化と減少が進み職場のバランス良い循環がスムーズに行われず深刻な問題となっている。一昔前までは新規雇用の際に年齢制限を設定していたが、昨今ではそれを撤廃せざるを得ない医療施設が多くなっており、現場のニーズ増加による雇用緊迫感が見て取れる。

未就労者の再就業支援や種々のプロジェクトが行われてはいるが、目覚ましい成果を得ていない。新人看護職員の離職率も10%台と他職種に比較して低いが、その解決にはいまだ多くの問題を抱えているのが現状である。



臨床実習

監事 大口 正樹

当院では、以前より視能訓練士（ORT）の実習を年に1～2名引き受けています。教えることは大変なのですが、当院でORTを採用する際の情報としては大変役立っております。また小樽市医師会看護高等専修学校の学生に対して、実習が始まる前に地域見学臨地実習と称して医療機関の現場を経験させています。半数の学生が医療機関での勤務を経験したことがないので、現場の雰囲気を知ってもらうために行っており、当院もこの方針に賛成し、現場を提供しております。見学初日に貧血を起こした人がいたので、実地を経験することは必要と思われる。

以上の2件は想定内ですが、最近驚いたことに、札幌医大出身で西伊豆の病院で働いている30歳代の外科医が総合臨床医を目指しているのを見学させてほしいと来院されました。西伊豆地方は、気候は温暖で住みやすいのですが、過疎地で医師不足に悩んでいるようです。

余談ですが、昔三島に住んでいたことがあり、西伊豆地方を旅行したことがありました。思い起こすと、道路は舗装されていなくてヘビがあちこちにたくさんいたことや、ウツボを釣って輪切りにして食べたがおいしくなかったという記憶があります。地元の漁師さんはおいしいと言っていました…。

話を元に戻しますと、その外科医は当院に来る前に札幌医大の眼科で一週間勉強しましたが、大学病院の患者は一次医療で診るような人がいないので、開業医での見学を希望したと言っていました。勤務先の病院で細隙灯顕微鏡と眼底検査装置を買ってもらえるとのことでしたが、この2つの器具があれば大体の眼科診療は可能です。ただ使いこなすには相当の経験が要ります。

今後も当院が役に立つのであれば積極的に協力していきたいと考えております。